

# 乙女高原が好き！ 2601 号

暖かくなってきて、桜前線が北上しています。とはいえ、標高1700mの乙女高原はまだ春浅しというところですが、そこそこに春の気配が感じられるようになってきました。

ファンクラブの活動は冬の間も乙女高原観察交流会、乙女高原フォーラム、定期総会など行われました。そして、いよいよ新年度の活動が始まります。まだ高原は早春ですが、かけあして春はやってきて、季節は進んでいきます。ファンクラブでは今年もいろいろな活動を予定しています。ぜひ多くの皆様に乙女高原に来ていただき、高原の自然や活動を楽しんだり、盛り上げていただければ嬉しいです。

## ～2026年度始動～ 2025年度総会開催

記事 植原 彰

3月15日、ポカポカ陽気の午後、山梨市役所牧丘支所2階の会議室で、2025年度乙女高原ファンクラブ総会が行われました。準備は13:30から始めました。助成金で購入した書籍を買い物かごに入れて持参し、ブックエンドを使って並べました。貸し出し簿に名前等を書けば、会員であれば誰でも借りられます。名付けて“乙女高原の本棚”です。受け付けの準備もしました。

参加者が三々五々来てくださいました。峡東林務環境事務所長の金丸さんや県有林課長の種元さんも参加してくださいました。参加者は全部で19名でした。

14:00 きっかけから、代表世話人の三枝さんの発声で総会開会。代表世話人の角田さんのあいさつ、金丸さんの来賓あいさつと続きました。

角田さんを議長として議事が始まりました。2025年度活動報告と2025年度決算報告を植原から。会計監査報告は会計監査人を代表して春日さんにしていただきました。続いて、2026年度活動計画案と2026年度予算案を植原から提案しました。2025年度活動報告、2026年度活動計画案は同封資料や乙女高原ファンクラブホームページをご覧ください。

これとは別に提案した活動計画案もありました。以下の通りです。

(1) 高槻先生から2026年度調査(案)

①訪花昆虫調査、②植生調査、③フクロウ巣箱調査、④シカ糞サンプリング

(2) 笛川学園(2026年4月、笛川小中が一緒になり開校)乙女高原体験学習支援

(3) ヒメギフチョウの保護策

・基本的に、今年度は特に何か「仕掛ける」ことはせずに、天然記念物指定の成果を確認する年にする

・産卵・幼虫の成長・ウスバサイシンの食害について、調査を継続し、結果をまとめる

(4) 自然共生サイトへの登録申請を目指す

(5) 乙女高原フィールドガイドシリーズ4作品の増刷(1)・改訂(1)・新規作成(2)を目指す

いずれも、総会参加の皆さんから承認をいただきました。

最後に出席されたお一人お一人から一言ずついただいて、2025年度総会をお開きとしました。

皆さん、今年も乙女高原でお会いしましょう。

※“乙女高原の本棚”は、林道開通後、グリーンロッジ内に開設します



## 第23回乙女高原フォーラム

前号にも記載しましたが、第23回乙女高原フォーラムが1月25日に開催されました。今号ではフォーラムでの北原正彦さんの講演内容を掲載します。

北原さんがお話しされたことを植原が文字起こししました。内容は変えずに、言い回しを多少変えたところがあります。ですから、文責は植原にあります。



# 乙女高原のチョウと生物多様性

**北原 正彦さん**：定年前は、山梨県富士山科学研究所で希少蝶類の生息環境や保全対策について研究し、退職後は衰亡著しい里地里山の蝶の保全を目指して奮闘中。現在、甲武信ユネスコエコパーク保全活用委員会、南アルプスユネスコエコパーク科学委員会、山梨県環境影響評価等技術審議会の各委員等

本日は乙女高原フォーラムにお招きくださり、本当にありがとうございます。昨年、山梨市がヒメギフチョウを天然記念物にしましたが、その産みの親が乙女高原ファンクラブです。先ほどお話された宇津さんが提案され、ファンクラブで調査等を行い、それが実ったわけです。おめでとうございます！（拍手）今日は、皆さんの努力の賜物である天然記念物になりましたヒメギフチョウを皆さんにご紹介したいと思います。私の話を聞いて、このチョウに愛着をもっていただいて、今後の保全活動に関わっていただきたいと思っています。

## ◆ヒメギフチョウとはどんな蝶か

ヒメギフチョウの紹介をします。黄色と黒の縞々模様から分かりますようにアゲハチョウ科に属しています。ただ、ほかのアゲハチョウに比べてずっと小型です。体長約50mm。成虫は、春、桜が咲くころに出てきて、夏にはいなくなります。春だけ出てくる昆虫や花を「春の妖精（スプリング・エフェメラル）」と呼びますが、その一つです。蝶の愛好家の中では「春の女神」、「春の舞姫」と呼ばれていて、垂涎的のです。蝶のマニアが採ってしまっ、とどんどん減っている蝶です。



ギフチョウ属の祖先が地球上に現れたのは、人類よりずっと前です。第三紀(3,000万年前)にはすでに地球上に生息していたと言われており、生きた化石とも言われます。そういう貴重な蝶です。

ヒメギフチョウの生活史です。ヒメギフチョウの卵や幼虫がいる環境は、山地の落葉広葉樹林で、早春に日当たりの良い環境を好みます。母蝶は、林床に芽吹いた食草ウスバサイシンの葉の裏に、まるで真珠のような、息をのむほど美しい卵を塊にして産みます。卵から幼虫が孵化して1齢幼虫となり4回



脱皮して、最終には5齢幼虫となります。6~7月に蛹となり、そのまま夏・秋・冬と約10ヶ月間、蛹で過ごします。このように蛹の姿で長い期間ずっと過ごすのが特徴です。

## ◆リュードルフィア・ライン

ヒメギフチョウの近縁種としてギフチョウがいます。ヒメギフのほうがギフより一回り小さいです。模様は、ギフのほうが黒い帯が太いです。ですから、ギフのほうが黒っぽく、ヒメギフのほうが黄色っぽく見えます。近縁種としてシナギフチョウ、オナギフチョウがいますが、これらは中国にしかいません。ギフチョウ属のチョウとしてはこの4種です。日本にいるギフチョウ属のギフチョウとヒメギフチョウ、この2種が、まあビックリするくらいうまく棲み分けています。本州の中部地方を境界に、西南日本に生息しているのがギフチョウ、東北日本にいるのがヒメギフチョウです。この2種の分布の境界線のことをリュードルフィア・ラインといいます。リュードルフィアというのはギフチョウ属の(学名の)属名です。



日本にはこの2種とも見られる地域が4箇所あります。そのうちの3箇所は、新潟・山形の県境付近など、すべて日本海側です。唯一、太平洋側でギフチョウとヒメギフチョウの両種が混生しているところが山梨県なんです。

山梨県内の両種の分布域を見てみますと、ギフチョウの分布域は富士川をさかのぼって来て、一番奥が本栖湖周辺、パノラマ台のあたりです。ギフチョウの富士川沿い個体群の北限です(ここはギフチョウの分布最北限ではありません。それは東京都の高尾山のあたりでした。絶滅してしまいました)。

一方、ヒメギフチョウは御坂山系に生息していました。この御坂山系のヒメギフチョウ個体群の西端・南限がパノラマ台でした。ここはヒメギフチョウの日本の最南限でした。ここが太平洋側唯一の混成地でした。

また、南アルプス前衛の楡形山にもヒメギフチョウは生息していました。ここにはたくさんいました。私も小学生のときに楡形山でヒメギフチョウを採集した思い出があります。ところが、今まで紹介した県内の生息地は、すべて絶滅です。もしかした

ら、ギフチョウはどこかに生き残っているかもしれません。

## ◆甲武信ユネスコエコパークのシンボル蝶

ヒメギフチョウは甲武信ユネスコエコパークのシンボル蝶になっています。日本の分布域を詳しく見ると、ギフチョウは西南日本に広く分布していますが、ヒメギフチョウは分布が途切れていて、中部地方、東北地方、北海道の個体群が分断されています。遺伝的な解析はまだですが、中部と東北の個体群を調べると、おそらくかなり分化が進んでいます。北海道のものは完全に分化が進んでいて、亜種的な扱いになっています。

一方、ギフチョウは日本にしかいません。で、学名はリュウドルフィア・ジャポニカです。日本特産種。ですがヒメギフチョウは中国東北部(旧満州)、シベリアなど、日本を含め極東の固有種です。山梨県の個体群は日本最南端の個体群です。南アルプス前衛山地や御坂山地では絶滅の可能性が高く、甲武信ユネスコエコパークに生息するヒメギフチョウは温暖化の進む現在、重要性が極めて大きいといえます。

全国的な環境省の基準に照らし合わせてみます。環境省のレッドデータ・カテゴリーでは「準絶滅危惧種(NT)」に分類されています。ランクで言うと、絶滅危惧1類・2類・準絶滅危惧となりますから、3番目です。山梨県のレッドデータブックでも、国と同じく「準絶滅危惧」です。

ところが、各県ごとのレッドデータ・カテゴリーを見てみると、長野や山梨では「準」ですが、岐阜、群馬、新潟、福島では「1類」に分類されています。このように、ヒメギフチョウ本州亜種は、分布している全ての県で絶滅危惧種に指定され、危険度の高いレベルにあります。

天然記念物としては、県指定が群馬県、町村指定では長野県の白馬村や小谷村、山形県の大石田町や鮭川村です。白馬村では密猟者が多いので保護監視員の制度があり、パトロールをしています。

甲武信ユネスコエコパークの話をして。2014年4月に山梨環境会議という団体が発起人となり秩父多摩甲斐国立公園を国連教育科学文化機関(UNESCO)の生物圏保存地域(BR=日本での呼称はエコパーク)に登録することを提案しました。日本のユネスコ国内会議で審議され「人間活動と生態系保全のバランスがとれている、生物多様性保全上とても重要な地域である、さらに、持続可能な経済活動が行われている」という理由から、ここはエコパークにする価値がある」と、登録を目指すべきとの結論が得られ、2019年6月、めでたく甲武信エコパークが誕生しました。発案から登録まで5年でした。県が事務局となってリーフレットも作成されました。そのリーフレットには甲武信エコパークの特徴の第2として、チョウ類の希少な宝庫になっていることが取り上げられています。もう一つのリーフレットでは、ヒメギフチョウの写真が「核心地域」のところに載っています。これはうまくないなあと思っています。というのも、ヒメギフチョウは核心地域にいません。カエデも麓の方からあるので、この写真もうまくないと思っています。

甲武信ユネスコエコパークについて、皆さんに覚えておいていただきたいことがあります。それは、ここが4大河の源流域であるということです。甲武信ヶ岳から南に流れているのが笛吹川。富士川に名前を変えますね。埼玉に流れていくのが荒川です。荒川は最終的には東京湾に流れ込みます。長野に流れていくのが千曲川。信濃川に名前を変えます。日本一長い川です。さらに、多摩川の源流も笠取山にあります。これで4大河です。4大河の源流域であることもエコパーク登録の理由の一つです。

甲武信ユネスコエコパークの地図を見ると、中心

に秩父山地の尾根の部分があり、核心地域になっています。核心地域を取り巻くように緩衝地域、そのまわりに人が生活している移行地域が広がっています。乙女高原は緩衝地域と移行地域の境界あたりに位置しています。エコパークの山梨県側の真ん中にあります。

今度は、甲武信ユネスコエコパークのシンボルマークを見てみましょう。真ん中にどーんとこのちょうちよがいます。それを取り囲んで、ぐるっと4本の曲線が描かれています。これが4大河です。富士川、信濃川、荒川、多摩川です。ちょうちよの下の山は甲武信ヶ岳です。ちょうちよの右下にカエデの葉があります。一番大きくて、一番いばっているのがヒメギフチョウです(笑)。

手前味噌の話になり恐縮ですが、山梨日日新聞社刊『山梨の蝶』の表紙に飾られているがヒメギフチョウの写真なのですが、この写真は私が大学院1年の時(1979年5月6日)に乙女高原の生息地で撮影したものです。当時(ほぼ半世紀前)は、今とは比べものにならないくらいたくさん蝶が飛んでいました。ですから未熟な私にも、こんなにピンの良い写真が撮れ、その後、本の表紙を飾ることになりました。

従って、ヒメギフチョウは甲武信ユネスコエコパークを代表するばかりでなく山梨県を代表する蝶の1種であることがお分かりいただけると思います。

## ◆ヒメギフチョウ減少の原因

さて、ここから寂しい話になっていきます。

『日本列島弧の蝶 第1巻 アゲハチョウ科①』という本に、ヒメギフチョウの分布図が載っています。それを見ると、ヒメギフチョウ中部個体群は山梨県・長野県・群馬県(と岐阜県の一部)にしかいません。先ほどもいいましたが、本栖湖北岸がヒメギフの最南端でした。ここも含めて御坂山系全体で数十年以上確認記録はありません。ほぼ絶滅です。南アルプス西部山系(長野県伊那谷)が次の南限なのですが、昔から個体数少なくて、近年確認の記録全くなし。ほぼ絶滅です。驚いたのは、南アルプス東部前衛山系(楡形山、甘利山、日向山等)です。過去のヒメギフチョウ多産地です。ところが、ここも、何が原因かわかりませんが、近年全く確認記録なし。ほぼ絶滅です。

奥秩父(甲武信)山系は、増富、瑞牆など、かつてはたくさん分布していたのですが、現存では乙女高原周辺のみで生息が確認されています。ですので、現状では長野県の中央アルプス北部と共に、甲武信エリアは日本最南限のヒメギフチョウ生息地と考えられます。なお、大菩薩周辺では近年全く記録がありません。

どうしてヒメギフチョウは減ってしまったのか? 乙女高原ファンクラブの皆さんと考えてみました。天然記念物指定前の話です。

1番目の問題は、採集者、マニア、標本商(業者)等がヒメギフチョウの生息地にやってきて、根こそぎ捕っていくという状況です。環境省による準絶滅危惧種でも「捕ってはいけない」という縛りはないんですよね。法令違反ではないんです。ひどいケースでは、集団で来て根こそぎ捕っていきます。去った後は一頭も残っていません。卵を捕って行って、飼育して親にする人もいます。

採集者の存在によって乙女高原のヒメギフチョウに負担がかかっています。

例えば、去年の例ですが、4/27 標本商の男が、大きな青い捕虫網を持ってきて、林道で本種を待ち構えていたんだそうです。乙女高原で自然観察していた人の報告です。「ヒメギフチョウですか? 採る



のをやめていただけませんか」と声を掛けたら、その男が「なんの権限がある?」「ここは規制があるのか?」と反論してきて、悪びれる様子はまったく無かったそうです。「強制か? 注意するなら、シカの害をどうにかしたほうがよっぽどマシだ」とさえ。周囲に人はおらず、あまり刺激して興奮させても大変だと思い、「やめないのですね。では、市に報告しておきます」と言って、その場を去ったそうです。4/30には、別の人が、採集者3組5人(1人は標本商、3人は学生、1人は学校教諭ふうの男)を確認したそうです。

このように、ヒメギフチョウが発生する時期には採集する人が押しかけて、どんどん捕って行ってしまふ。2,3頭だけ捕って帰るのならまだしも、捕れるものは全部捕ってしまふ。だから絶滅に向かってしまいます。このことに危機を感じた乙女高原ファンクラブの宇津さんが天然記念物指定を呼びかけ、ヒメギフチョウを天然記念物にしようという運動が始まって、1年経たないうちに天然記念物に指定されました。

2番目の問題は、ニホンジカによる食草の食害です。ヒメギフチョウの幼虫が食べるウスバサイシンをシカが食べちゃう。場所によってはウスバサイシンが見られなくなってしまったという噂もよく耳にします。なにしろシカ対策が必要だと言われてきました。ヒメギフチョウは狭食性(食餌スペシャリスト)といって食べる葉が限られていて、ウスバサイシンの葉しか食べません。他のアゲハが食べるからといってカラタチや柑橘系の葉っぱをやっても食べません。ですから、ウスバサイシンの葉がなかったらアウトです。

3番目の問題は気候変動です。ひどいですよね。アメリカはパリ協定からも脱退しました。今後、さらに進んでしまうと思われませんが、地球温暖化が原因で多発傾向のある晩冬の高温(暖冬)によって蛹が休眠から覚めて死んだり、早春の異常低温(突発的な寒波)で蛹が死んだりしてしまいます。ヒメギフチョウ減少の原因について、以上の3つの説があります。

### ◆山梨市・甲府市で天然記念物に指定

1番目の「マニアによる採集」問題については、それによって本当に絶滅した事例があります。今から40年前、白州町(当時)はヒメギフチョウの大産地でした。そこにマニアがやってきて、当時、成虫1頭3~5万円で購入されたんだそうです。白州町の教育委員会は困って看板を立てたり、監視員を付けたたりしたけれど、さっきの例のセリフですよ、マニアは「なんの権限がある?」「ここは規制があるのか?」と言って、ちっとも言うことを聞かない。蝶はどんどん捕られ絶滅です。(天然記念物)法令指定できなくて絶滅です。今回白州町の二の舞には絶対にしたくなかったのが本当によかったです。

私が疑問に思ったのは、白州町の教育委員会は、なぜ、当時、町の天然記念物に指定しなかったのかということです。「国が天然記念物にしてくれないから」と国のせいにはばかりして、なぜ自分たちで指定しなかったのか、そこが疑問であり反省点です。そこまで知恵がまわらなかつたのか、新しいことに取り組む大変さをしんどいと思ってしまったのか、理由は分かりません。

今回、ヒメギフチョウを天然記念物指定する上で大きな問題がありました。まずは県指定を考えました。ところが、県指定は難しいんです。なぜなら、県全体の分布、現状を明らかにしなければなりません。それには4~5年くらいかかって、ようやくエビデンスが揃うことになるでしょう。早急に指定するために、県指定ではなく市指定を目指すことにしました。

ところが、山梨市で天然記念物指定を目指すのにも課題があります。乙女高原エリアでは、隣接する甲府市側にもヒメギフチョウの生息地があり、そっ

**「ヒメギフチョウ」が市の天然記念物に指定されました**

乙女高原に生息している「ヒメギフチョウ」が5月22日、市の天然記念物に指定されました。

「ヒメギフチョウ」はアゲハチョウ科に属する50mmほどのチョウです。成虫は桜の開花とともに出現するため、春の女神と呼ばれています。準絶滅危惧種に指定されていて、全国的に数が減少しています。

乙女高原ではヒメギフチョウの卵と幼虫が確認されていますが、年々個体数が減少しているため保護が必要です。

園生涯学習課文化財担当 内線 2323

**みんなで守ろう!**

**お知らせ ヒメギフチョウを市の天然記念物に指定しました**

園歴文化財課 ☎055(223)7324

ヒメギフチョウは、春に羽化するアゲハチョウの仲間。黄色に黒の縞があり、後翅の先端に赤い斑紋があるのが特徴です。山梨県内では、甲府市から山梨市にかけてのみ生息が確認されている、希少な種の蝶です。

レッドデータブック(環境省)で準絶滅危惧種に指定されています。見つけた際は、そっと見守りましょう

**祝!!**

**乙女高原 草原を**

春になったら会えるよ

**祝 ヒメギフチョウ、山梨・甲府両市天然記念物指定**

山梨市、甲府市がほぼ足並みを揃えて、昨年(2025年)、ヒメギフチョウを天然記念物に指定しました。両市の取り組みはとも息が合っており、大いに評価できると考えます。(白州の二の舞だけは踏むな!)

植原先生嬉しくて早速チラシに!

ちも一緒に保護していかないとダメです。ヒメギフチョウには市と市の境界線は意味がありません。ヒメギフチョウにはベルリンの壁はありません。特に、乙女高原エリアでは、成虫は山梨市側の草原に来て花の蜜を吸い、甲府市側の林床で卵を産む傾向があるので、両市で指定しないと、ヒメギフチョウがライフサイクルを全うできません。結果、山梨市が先行しましたが、甲府市でも指定され、両市揃って天然記念物に指定されました。おめでとうございます。

山梨市側は宇津さんと植原さん(文化財審議会委員)、甲府側は萩原さん(文化財審議会委員)と平塚さん(教育委員会文化財担当)に特にご尽力いただきました。現地調査したりして調べ、エビデンスを揃えて文化財審議会に提案したわけです。山梨市・甲府市が足並みを揃えて昨年(2025年)、ヒメギフチョウを天然記念物に指定しました。両市の取り組みはとも息が合っており、大いに評価できると考えます。乙女高原ファンクラブなんて、さっそく乙女高原の草刈りボランティアのちらしにヒメギフチョウの写真を載せて、「春になったら会えるよ」と宣伝したところでした。新聞でも大きく取り上げられました。記事によると、甲府市では18年ぶりに天然記念物が指定されたそうです。しかも、昆虫では初めてだそうです。天然記念物で圧倒的に多いのは木ですからね。

今年のゴールデンウィークの頃、いよいよ成虫が出てきますから、天然記念物の印籠(いんろう)を見せて「この印籠が目に入らぬか!」と強気でいきたいと思います(笑)。

### ◆ヒメギフチョウ(成虫)の生態

私は1997年、八ヶ岳で、マーク・アンド・リキャプチャーという調査法による調査を行いました。アサギマダラのマーキング調査は有名ですが、それをヒメギフチョウで行ったということです。ヒメギフチョウを捕まえて、後翅の裏に油性のサインペンで1,2,3,...と数字を書き、放します。それを何回も繰り返しました。4/27にはオス26頭にマークしました。メスは11頭です。

ウスバサイシンは林の広い範囲にまんべんなく分布しているのではなく、ところどころに、パッチ状に分布しています。ですから、ウスバサイシンのパッチ1つがウスバシロチョウ生息地1つと考えることができます。私は1人で調査しなければなりません、1人でも1つのパッチなら調査することができます。私は1つのパッチに1日中張り付いて、ヒメギフチョウがいたら網で捕まえて、数字を書いて放すという作業を繰り返しました。

4/27に印を付けたオス蝶のうちの1部は、次の5/5の調査の時に同じパッチで捕らえられました。でも、大部分はいなくなっていました。一方、5/5に新たにマークしなければならぬ蝶がたくさんい

ました。これらの蝶は羽化してからだいぶたっているの、翅はだいぶ汚れていました。新たにマークされた蝶は、他のパッチから調査パッチに新たに飛んできたということです。というところで、オスの場合は大部分が羽化したパッチから離れますが、とどまる蝶もいることが分かりました。そして、他のパッチから飛んでくる蝶がたくさんいることが分かりました。

メスの場合は4/27にマークした個体は全部よそに行ってしまった。メスは分散性が高いことが分かりました。メスと交尾したオスは、そのメスに2度と交尾させないために、精囊(のう)をメスの腹部に入れた後、分泌物を出して、メスの生殖器をふさいでしまいます。これを交尾囊といい、これがあるかかないかで、そのメスが交尾をしたかしないかが分かります。4/27にマークしたメスは羽化したてで新鮮でしたが、みんな交尾囊が付いていました。つまり、ヒメギフチョウのメスが羽化したら、とたんにオスがやってきて交尾してしまうということです。5/5の調査では、マークしていないメスばかりが捕まりました。他のパッチから分散してやってきたメスたちだったということです。

この調査からわかったことは、ヒメギフチョウたちは近親相姦などが起こらないよう遺伝的交流をしながら、ウスバサイシンのパッチを行ったり来たりしていることがわかりました。こういう構造を「メタ個体群」といいます。空間的に離れた複数の局所的な個体群が、個体の移動を通じて互いに連結し、全体として個体群として存続しているという構造です。ヒメギフチョウ個体群は、まさにメタ個体群でした。このことから、山梨市と甲府市が揃ってヒメギフチョウの個体群を維持していこうという取り組みがヒメギフチョウの保全には有効です。

### ◆ヒメギフチョウ(幼生期)の生態

2024, 25年と植原さんがヒメギフチョウの幼生期の調査をしてくれました。調査地は林床にウスバサイシンがたくさんある落葉広葉樹林の中です。特に2025年は「ウスバサイシンは本当にシカに食べられているのか」を明らかにするために、方形枠を作って、その中のウスバサイシンの葉の数を数えるという作業をしてくれました。

植原さんは卵や幼虫の数を調べました。ヒメギフチョウは卵を卵塊として産みますから、幼虫が孵ったあと、3齢までは集団で生活します。葉を食べるときも寝るときも、いつもウスバサイシンの裏に仲良く一緒にいます。ですから、卵から3齢幼虫までは、ほとんど数が変わりません。ところが、単独生活をするステージになると、数ががくんと減ります。分散し、今までと違う葉に移動して餌を食べようになるからです。5齢だと完全に単独でいます。全員バラバラで、しかも、餌が足りなくなると隣のウスバサイシンに移ったりするので、減ってしまいます。

単独生活になってもちゃんと全部の幼虫の数が数えられればはっきり言えますが、単独生活になった時が一番危ないんです。移動してちゃんとウスバサイシンの葉が見つければいいですが、見つけれなければ、そこで死んでしまいます。あるいは、移動途中でクモみたいな天敵にやられることもあるでしょう。ですから、おそろく4齢から5齢の段階は、死亡率が急に上がると思います。ここがヒメギフチョウの大きな試練です。

とはいえ、植原さんの調査でわかるのは、24年も25年もほぼ同じトレンドで成長が進んだということです。卵の数も幼虫の数もほぼ同じで、



同じような推移を見せました。

さて、ウスバサイシンの葉を数える調査についてです。植原さんは1m四方の方形枠を林の中に5つ設置しました。その中にあるウスバサイシンの葉を全部数えました。5月中旬から7月下旬まで、ほぼ1週間おきに調べられています。葉の数は途中でまじ微増しています。新芽が出て、新しい葉が増えたからでしょう。ですから、調査最終日が葉の数が一番多くなっています。もしシカが葉を食べていたら、右下がりのグラフになるはずなのに、そうになっていません。花の数も調べていますが、花の数も減りません。このことから、シカなどの動物による採食はなかったと結論づけています。植原さんは自動カメラもセットしたのですが、カメラにもシカの姿は映ってなかったそうです。

ということで、現時点で、乙女高原域では、シカがウスバサイシンを採食していない事実が判明しました。こんなデータは日本にはまだないと思います。「シカがウスバサイシンを食べている」という仮説が覆されたわけです。ですから、さっきの標本商のおじさんには言いたい。「乙女高原エリアでは、あんたは、シカのことをとやかく言う筋合いはないですよ。シカを犯人にしないでください。シカに濡れずぬを着せないでください」

とはいえ、シカの採餌状況は変化します。今後の状況の推移を注意深く見ていく必要性はあります。

### ◆ギフチョウの場合

先日、日本チョウ類保全協会の会誌39号(2025)が届きました。それに書いてあったことです。ギフチョウの関東最後の個体群は神奈川県藤野町の石砂山(いしざれやま)個体群です。高尾や丹沢にもいたのですが、最後に残ったのは石砂山のみです。天然記念物として保護されているのですが、少なくなり、チョウ類保全協会が立ち上がって、シカ害を食い止める活動をしているそうです。葉が全部食われてしまい、茎しか残っていない写真もありました。ギフチョウが食べているカントウカンアオイは常緑です。ですから、冬の間シカに食われているのかもしれない。ギフチョウもたいへんな状況になっているということです。

### ◆ヒメギフチョウの保全策

ヒメギフチョウが山梨市・甲府市の天然記念物になったので、今後、保全するためにどんなことをしていっていいかについてまとめたいと思います。一番大きな問題は、採集者、マニア、標本商(業者)等による過度の採集圧です。この課題が一番効果が期待できるのは法的規制です。昨年、これに関しては一気に事態が進みました。山梨・甲府両市におけるヒメギフチョウの天然記念物指定です。学術的な目的などのための採取許可を得ない限り、全ステージ(卵、幼虫、蛹、成虫)で採取できなくなりました。

しばらくの間重要なことは、「本件の一般市民への周知」と「現地での採集者の監視と啓蒙活動」であると思われます。看板を立てるという手もありますが、看板を立てるとヒメギフチョウの存在を教えってしまうこととなります。また、標本商の中には密猟であることを分かってやる人もいるので、看板を立てることに関しては、これから熟議しなければならないと思います。

2番目のシカによる食草の採食圧についてです。植原さんの精力的な調査により、どうやら乙女エリアでは、食草ウスバサイシンのシカによる食害はないことが判明しました。ですから、この件については、しばらくは安泰なのかなあと考えます。しかしながら、シカの採餌形態は刻々と変化します。ですから、ウスバサイシンのモニタリングは続

けていただきたいと思います。

3番目の気象・気候問題は、地球レベルの問題です。温暖化は我々地球人一人一人の問題であり、一人一人が自分事として考え、対策に取り組んでいくのが大切です。それとともに、乙女エリアでも、気候変動による変化が起きていないか、エビデンスを得ていく必要があります。

### ◆乙女高原エリアの重要保全種の蝶

講演の第1部「乙女の舞姫 ヒメギフチョウ—その現況と課題—」に続いて、第2部「甲武信ユネスコエコパークに生息する希少チョウ類—代表種の紹介とその現況に迫る—」を準備したのですが、講演時間があと3分になってしまいました。乙女高原エリアには蝶の希少種がいっぱいいます。私の用意した資料を見れば「え、こんなにたくさん希少種がいるの!」とびっくりされると思います。

乙女高原エリアの重要保全種その1はアカセセリです。ジェット戦闘機のような形の蝶です。皆さんがよくご存知のモンシロチョウやキアゲハの全国分布図とアカセセリの分布図を見比べてください。

モンシロやキアゲハがほぼ日本中にいるのと比べ、アカセセリがいるのは中部地方だけです。しかも、甲武信エリアが分布の中心です。国も県も絶滅危惧1類です。ほぼ山梨、長野、群馬の里山から山地帯に分布しています。分布域の県では全て絶滅危惧種です。東京、埼玉、静岡はすでに絶滅です。このように大変な状況になっているアカセセリですが、乙女高原は県内で残された数少ない安定的な生息エリアです。とはいえ、乙女高原の南に帯那山という草原があります。かつてはアカセセリがたくさんいましたが、今は一匹もいません。一つの原因はシカです。アカセセリはアザミの花などが好きですが、帯那山の草原は、今、ほとんど花が咲きません。シカの嫌いなコウリンカくらいです。ですから、乙女高原だって安心はできません。



乙女高原エリアの重要保全種その2はヤマキチョウです。やはり、中部地方、東北地方の一部にのみ分布しています。甲武信エリアを中心に、山梨、長野、群馬の里山から山地帯に生息しています。山梨のカテゴリーはまだ準絶滅ですが、まわりの県は絶滅危惧1類です。



乙女高原エリアの重要保全種その3はアサマシジミ。乙女高原にはいません。乙女高原から下ってきた塩平や北原、小檜山のふもとなど、里山的な環境にいます。風前の灯火です。アサマシジミも採集圧がものすごいです。マニアが来て、捕っていつてしまいます。天然記念物の次期候補だと思います。

乙女高原エリアの重要保全種その4のウラギンスジヒョウモンは全国的にいたのですが、一気にいなくなりました。西南日本では近いうちに全部いなくなるでしょう。山梨でも「ここに行けば必ず見られる」という蝶ではなくなりました。



乙女高原エリアの重要保全種その5のウラジャノメは、地味な蝶だけでなく、珍しい蝶なんです。山梨、長野、群馬、栃木を中心とした山岳亜高山域にいます。これも可愛がってあげてください。

乙女高原エリアの重要保全種その6のツマジロウラジャノメも地味です。どんどんいなくなっています。崖地のある溪谷や林道沿いの特異なところにあります。そういう環境がなくなりつつあります。

乙女高原にはヒメギフチョウのみならず、いろいろな蝶がいますので、そんな蝶たちに目をかけてやってください。奥秩父・甲武信エリアで何とか生き延びる希少チョウ類の数々を、私たちは温かく見守りながら、未来永劫に守っていかなければならないと思っています。ご清聴ありがとうございました。

▲第23回乙女高原フォーラムのYouTube動画が4月9日までの期間限定で配信中です▲

## 雪の乙女高原観察交流会

記事 毛利崇行

2月7日(土)の自然観察交流会は、雪の天候の中、参加者は3人(角田さん、加藤さん、毛利)でした。車2台に分乗し、9時過ぎに「道の駅花かげの郷まきおか」を出発しました。

まず、中牧神社近くに所在する角田さんの知人宅敷地内に自生するフクジュソウ群落を観察しに行きました。このフクジュソウは「ミチノクフクジュソウ」と称する種で、雪の中きれいに咲いていました。この種は人工的な栽培が困難で、移植すると最初は開花するそうですが、その後は枯れてしまうとてもデリケートな植物です。また、場所を移動しながら植生するという珍しい特徴も併せ持っているそうです。フクジュソウの中でも、ミチノク種だけが移動し植生すると角田さんと間瀬さんから聴きました。

乙女湖は、雪で視界が悪かったのですが全面結氷しているようでした。上空を猛禽類(おそらくノスリ?)が旋回しながら滑空しており、地上の獲物を探索しているようでした。

焼山峠から小檜山方面に向かう林道脇の氷華は、残念ながら雪に埋もれ観察できませんでした。後日、植原さんから聞いた話によると、氷華は「氷が茎を裂いて出てくる」現象なので、いったん茎が裂けてしまうと、ストローに穴が開いたのと同じく、もう水を吸い上げず、氷華は見られなくなるそうです。霜が降り始める時期だけの、はかない自然の芸術なのだそうです。

11時ごろ、乙女高原に到着しました。標高が高いためか積雪は約5cmと下界より深く、小雪が舞っておりました。ロッジの前にある百葉箱の温度計は-5℃を示していました。



乙女高原を散策しました。ロッジ前のエントランスの扉は開きましたが、展望台の扉は凍上により開けられませんでした。一面銀世界で、鳥はヒヨドリが1羽しか飛んでおらず、静寂が支配しておりました。そんな中、オオバギボウシの種、ヤマウルシの実、サルノコシカケ、アカゲラの巣跡等が観察できました。

動物の足跡が一切見られなかったのが意外でしたが、唯一所によりシカによるミヤコザサのはみ跡が見られ、動物の痕跡が観察できました。ところが、シカのはみ跡が見られないササの群落もあり、ミヤコザサではなく他の種類のササなのか疑問に感じました。

昼食となりましたが、足先が冷え切ってしまいました。角田さんからいただいたドリップコーヒーで温まることができました。

昼食後は、谷内坊主を見に行きました。スゲの頭の部分には雪が積もらず、雪面上にポコッと突出して見える姿が、普段見る谷内坊主と異なり印象的でした。

観察を終え、雪が降る中の下山となりましたが、無事「道の駅花かげの郷まきおか」に帰着できました。



## 乙女高原の春の活動が始まります!!

詳しくは、同封の「遊歩道づくり」チラシ裏面「2026年度活動計画」をご覧ください。

### ○ヤマアカガエル産卵調査

4月4日(土) / 4月19日(日) 集合9:00 牧丘の道の駅

### ○遊歩道づくり

5月17日(日) 集合9:30 乙女高原グリーンロッジ ~12:30

### ○自然観察交流会

4月4日(土)(ヤマアカガエル調査と兼ねる)

5月 日時がまだ決まっています。

決まりましたら、ホームページ等でお知らせします。



昨年の遊歩道づくり

## ●補助金・助成金をありがとうございました● 2025年度

乙女高原ファンクラブは各種団体様や企業様からいただいた補助金・助成金で運営されています。

山梨市/乙女高原保護活動事業補助金, 田丸グリーン基金, 富士フィルムビジネスイノベーション, イオン石和/ザ・ビッグイオン石和店, 一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団

## ●ご寄付をありがとうございました●

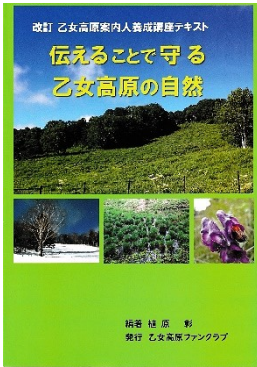
乙女高原ファンクラブは皆様からいただいたご寄付で運営されています。2025年3月~2026年3月

後藤多美子様、青木隆明様、秋元由喜子様、長池卓男様、橋爪強策様、市田淳子様、河野静江様、藤森静男様、鈴木 勲様、生山鈴子様、関森ノブ子様、浅井聡司様、辻万里奈様、坂本 浩様、鈴木辰三様、計良和子様、永原章二様、野村藤春様、宮城邦彰様・美貴子様、古川 祐様・すみれ様・拓人様、関根松三様、柴田保彦様、齋藤泰昭様、伏見 勝様、川畑悦子様、渡邊慶孝様、雨宮賢一様、雨宮 寛様、小林 薫様、池田真人様、匿名(明野ひまわり)様、小田川隆夫様・多美子様、浅川加代子様、柿崎洋子様、北 直行様、飯島早苗様、山下證善様、宮崎菊江様、角田信夫様、富樫さかえ様、榎田麗子様・幹夫様、恩田利明様、岡 直樹様、渡邊良介様、大歳君江様、向山源吾様・淑枝様、山下 浩様・律子様、牧野澄夫様、名執真理子様・義高様、白田昌美様、佃 和夫様、春日飛鳥様・龍琉様・櫻様、岡 智史様、雨宮浦助様、河井 廣様、武井京子様、前田記貴様、角田敏幸様、小林奈都夫様、赤松樹也様、井上敬子様、沢田真余様、古屋明子様、雨宮 久様、小野寺秀子様、関口徳子様、清水 徹様、近藤治樹様・和葉様・方昂様・愛子様、古田 敏夫様・千代子様、廣瀬晴美様、角田敏幸様、渡辺和男様、小澤 誠様、芳賀月子様、篠原 厚様、一ノ瀬久子様、駒田勝彦様、井上敬子様、川島節子様、山下智左子、伊佐治庸子様、榎田幹夫様、三村 正様、北島一良様、赤岩靖夫様、鈴木辰三様、相澤恵美利様、秋元由喜子様、三枝かめよ様、照井亜紀子様、植原 彰様

同封の郵便振込用紙は寄付金送付、「乙女高原大百科」「乙女高原の自然観察」(詳しくは、裏表紙)等の購入代金送付にご利用ください。寄付は任意ですが、活動には資金が必要なのでご協力いただけたらありがたいです。

●今号は編集を井上敬子、校正を植原彰さん・鈴木辰三さん・廣瀬晴美さんが行いました。その後、芳賀月子さん・三枝かめよさんの印刷、加藤信子さんの発送作業を経て、みなさまに届けられる予定です。

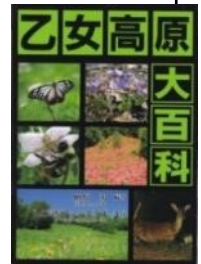
## 乙女高原ファンクラブの刊行物



乙女高原案内人養成講座のテキスト  
『伝えることで守る 乙女高原の自然』  
(A4判 270頁 2024年)モノクロ。2006年テキストの増補改訂版。頒価 1,500円。送料は1~2冊430円。送金は郵便振込・ゆうちょ銀行で。

乙女高原を歩く際のお供に『乙女高原の自然観察』  
(A5判 30頁 2023年)オールカラー。1ページに1テーマ。頒価 300円。送料は1冊:180円、2~8冊:270円。送金は郵便振込・ゆうちょ銀行で。

乙女高原とファンクラブ11年間の集大成『乙女高原大百科』  
(A5判 602頁 2013年)乙女高原メールマガジン11年間の中身を編集した厚さ3cmの本。一部カラー。頒価 2,000円。送料は1・2冊なら430円。送金は郵便振込・ゆうちょ銀行で。



## 乙女高原フィールドガイド シリーズ

…欲しい方は事務局までご連絡ください



フィールドガイドⅢ スミレの観察のおともに  
『乙女高原のスマイル・ウォッチング』 →在庫切れ

フィールドガイドⅡ マルハナバチ観察と調査のおともに  
『マルハナバチ ウォッチング 改訂新版』

フィールドガイドⅠ 春から夏にかけて咲く草花のガイド  
『乙女高原のお花たち 第三版』

いずれもA3判。両面カラー。折りたたみ済み。ポケットに入れられるサイズになっています。

## ■乙女高原ファンクラブの普通会員になりませんか？

『数は力』という言葉があります。ファンクラブの会員が多くなれば、それだけ乙女高原の保全に対するファンクラブの発言力が増します。まわりの方をファンクラブに『巻き込む』ことも乙女高原を守る活動の一つです。まわりの方にファンクラブをお勧めください。

乙女高原ファンクラブに入会するには… 「入会します 氏名・郵便番号・住所」というファックス、メール、手紙等を事務局までお届けいただければ、いつでも、だれでも会員になれます。 **おススメ!** 右フォームからも入会することもできます→  
・入会金も年会費もありません。乙女高原を守る力が1人分、大きくなります。  
・普通会员には年4回、サポーター会員には年1回、ニュースレターが届きます。



## ■乙女高原ファンクラブへの連絡先■

【事務局】植原 彰(方) 〒404-0013 山梨県山梨市牧丘町窪平 1110-3

TEL 090-7246-8625 FAX 0553-35-3682 電子メール otomefc@fruits.jp

※会報への原稿や写真等の投稿もこちらにお送りください。

WEB <https://fruits.jp/~otomefc/>

●郵便振込●番号：00220-8-71093 加入者名：乙女高原ファンクラブ

●ゆうちょ銀行●店名：029店「当座預金」番号：0071093 加入者名：乙女高原ファンクラブ

今号は、全会員にお送りしています。



ホームページ



フィールドノート  
旧観察ブログ



アーカイブ  
旧活動ブログ



乙女高原後援会  
フェイスブックグループ



インスタグラム